

第14話 キリスト教の伝来

イスパニアの宣教師からキリスト教が伝わる、主として九州地方に迅速に大いに広まる。

鹿兒島に来航

種子島にポルトガルの商船が漂着したのは、まったく偶然の出来事でしたが、もともとポルトガル人は、広く他国と貿易することを目的としていたので、折角、今まで知らずにいた国の者と相知ったこの好機会を空しく逃すようなことはしなかった。彼等はこれを機縁に、その翌天文13年に再び種子島に来航してから、しだいにわが国に来ることが多くなって、後には薩摩の鹿兒島や豊後の臼杵、府内（今の大分市）などへも来て貿易を始めた。

薩摩の了西

さて、彼等が鹿兒島に来始めた頃のことです。薩摩に了西という人がいたが、ある時に、喧嘩をした末に相手を殺して、大いに後悔していた。その折にたまたま鹿兒島に来合わせていたポルトガルの商人に出会ったので、その話をすると、商人は、「今、インドに神様のように尊敬されている偉い宗教家がいる。その方に会えば、そういう心の悩みなどは立ちどころに消滅するだろう」と言った。

了西はこれを聞いて大いに喜び、こっそりとポルトガル船に乗り込んで、インドに向った。ところが、マレー半島のマラッカまで行った時に折りよくも、向こうから出かけて来ていたその宗教家に逢った。それで、自分の身の上を話して、苦しい心の底を打ち明けた。宗教家は諄々と教えを説いて聴かせて、彼の心の悩みを癒してくれた。

この宗教家は、その名をフランシス・ザビエルというイスパニア（今のスペイン）生まれのキリスト教の宣教師でした。説いた教えは、勿論、キリスト教でした。

しかし、一体キリスト教とは何ですか？

キリスト教の起こり

今から2000年余りの昔、西アジアのユダヤという国のベツレヘムというところで生まれたイエス・キリストの唱えはじめた教えです。イエスはもと大工の子でしたが、長ずるに従い、この世の中が残忍と不正とに満ちているのを知って、深く心を痛めた。「いったい人生って何の事なのか？」彼はこういう疑問を胸に抱きながら、独りで荒野に行って、幾日も、幾日も、殆ど食べもせず、眠りもせずに、真実の魂の聲を聞こうとつとめにつとめた結果、ついに、この地上の人間はみんな1人の慈悲深い神の子供たちであるから、従ってまた全人類は互いに兄弟姉妹である、という考えに到達した。

すでに兄弟姉妹であれば、人間はみんな慈悲と親切と謙遜とを旨として、互いに合愛し合わなければならない。それなのに、今の世の人々はこの根本を忘れて、互いに相愛し合うことをしないために、不正が行われ、残忍な事も行われているのである。われわれはむしろ敵を愛し、憎いと思う者をも愛さなければ

ならない。そうさえすれば、世の中は平和になって、人類はみんな幸福になる。彼はこの考えに到達すると、ぱっと明るく天が開けて、そこに慈悲深い愛の神を見たのです。彼が30才の時でした。

それで、イエスは敢然として「愛」の教えを説きはじめた。忽ち続々と信者が集まって来た。ところが、大抵いつの世でも変わりがないように、新しい教えを説く者は、決まって古い教えを奉ずる者から危険な敵として迫害されるものです。イエスもまた迫害されました。ついに彼はそういう頑冥不靈な者共のために訴えられて、死刑の宣告を受けて、十字架に磔にされた。教えを説きはじめてから3年と経たないうちのことでした。

教会の勢力

こうして、イエスは死んだが、その教えは死ななかった。不孝な人類の耳に囁かれた愛と希望の新しい言葉は、迅速な勢いで世界に弘まった。西アジアの狭いユダヤの地から広いヨーロッパの本土に移って行って、そのころの世界の中心となっていたイタリアのローマに入ると、そこに信者たちは集まって、小さな教会を建てたが、この教会が、間もなくずんずんと大きくなって、後には、その長として仰がれたローマ法王は、ヨーロッパ諸国の帝王にも命令するほどに、大きな勢力をもつようになったのです。

耶蘇会の起こり

しかし、それと共に弊害もまた生じたのです。我が国の後柏原天皇の御代、西暦1517年に、ドイツのマルチン・ルーテルという人がローマ教皇に反対して、キリスト教の改革を唱えた。このために、キリスト教は新旧の2派に分かれて相争い、北ヨーロッパのほうでは俄かに新教の勢いが強くなったが、同時にまた、旧教徒のほうにも内部の改革を行う者が出て来た。中でもイスパニア人のイグナティウス・デ・ロヨラは、わが国の後奈良天皇の御代に耶蘇会（イエズス会ともいう）を起こして、最も熱心に旧教を説いた。前に述べたフランシス・ザビエルは、即ちこの耶蘇会の有力な宣教師でした。

ザビエルがキリスト教を伝える

ザビエルは、我が国の後奈良天皇の御代、西暦1541年に、ポルトガルのリスボンを出帆してインドに向かい、翌年にゴアに着いて、その地方に布教していたのですが、たまたまマラッカで薩摩の了西と逢った。そしてその悩みを聞くと、喜んで彼にキリストの教えを説いて聴かせながら、日本の事情を聞いて、十分に布教の望みが日本にあることを知る。そこで、二人の宣教師を連れて、了西の案内で日本に向かい、天文18年（西暦1549年）の7月21日に鹿児島に着いた。

時の薩摩の藩主は島津貴久でしたが、彼はポルトガル人との貿易で多くの利益を得ていた時でしたので、ポルトガル船が来たのを喜び、ザビエルにも会って、彼にキリスト教を領内に弘めることを許しました。その結果、翌西暦1550年にはすでに約100人の信者が出来ました。実に、これがわが国にキリスト教の伝わった始めです。当時はこの教えを切支丹宗と言っていました。

平戸に布教

ところが、天文19年（西暦1550年）にポルトガルの商船が肥前の平戸に入港して鉄砲を売り込んだ。平戸の領主は松浦隆信でしたが、そのころ、島津氏とは敵対していた間柄でしたので、島津貴久はこのポルトガルの船が平戸に入って、武器を売ったりしたのを喜ばなかった。折にも、領内には仏教のお坊さんが起って、さかんにキリスト教の排斥を始めもしたので、貴久はそれやこれやの関係を考え合わせて、急に命を下して領内にキリスト教を弘めることを禁止した。

ザビエルらは驚いて、いろいろと弁解を試みたが、貴久は聴かなかった。それで、よんどころなく、彼等は鹿児島を立ち退いて平戸に移り、松浦氏の許しを受けて布教を始めた。ここでも忽ち数百人の信者が出来ました。

ザビエルが京都に上る

しかし、ザビエルはこれに満足しなかった。彼は日本の中心である京都に行って、まことの主権者から日本全国に布教の許しを得ようと考えた。天文19年9月に、彼は京都に向って出発して、途中でそのころ西都といわれた周防の山口に立ち寄り、翌20年の正月に京都に着いた。ところが、京都は折から、將軍義輝の下に細川晴元と三好長慶とが争乱の真最中だったので、果たしてこれが1国の首府であるかどうか疑わせたほどでした。

のみならず、全く新来の異邦人が、どうして容易に天皇に拝謁など出来ようか。彼は將軍にすら謁することを許されなかったので、止む無く京都の町の辻々に立って、通行人に呼びかけて、熱心に教を説いてみた。しかし、戦乱のために動揺している人々は、立ちどまってこれに耳を傾ける余裕などをもっていなかった。

ザビエルは全く失望して、半月ほど京都に滞在して後、平戸に帰りました。

山口および豊後に布教

その後、彼は京都よりも寧ろ山口のほうが繁栄していることを思って、再び山口に行って、大内義隆の許しを得て布教していると、たまたまポルトガルの商船が豊後に来て、インドのゴアの総督から帰国を促す手紙を彼に齎した。それで、この船に便乗するために山口を去って豊後の府内に赴いたが、この時、彼は豊後の領主大友義鎮に大いに歓迎され、その地に布教を許されて、ここでもまた多くの信者を得た。

こうして天文20年11月に、彼は豊後を出発して、ゴアに帰り、日本が大いに有望な布教地であることを総督に告げて、更に宣教師を送る手筈や何かを定めてから、自分は中国に布教を試みようとして出かけた。しかしマカオの附近まで行った時に、不幸にも病氣にかかり、ついに天文21年12月に46才で亡くなりました。

キリスト教が全国に広がる

けれども、日本にはその後もしきりに宣教師が渡って来て、肥前の平戸や豊後の府内を根拠地として大いに布教につとめたので、殊に九州地方に信者が殖えた。後に、織田信長が延暦寺や本願寺の僧徒らの勢いを殺ごうとする政略の上から、一時キリスト教を保護して、京都に南蛮寺を建て、安土に学校を建てたり

第14話 キリスト教の伝来

した上に、宣教師に布教ふきょうの自由じゆうを許したので、俄にわかにキリスト教は殆ど全国ほどん ぜんこくに拡がって、北は奥羽地方ひろにまで伝わった。しかし、このキリスト教については、後のちにまた豊後ぶんご 島原しまばらの乱らんを語る時に改めてかた詳しくあらた述べくわます。

(第14話 キリスト教の伝来 終わり。 次は前頁に戻り、 第15話 織田信長の入京 へ)